

式辞 令和7年度第3学期始業式

皆さん、新年明けましておめでとうございます。

本日、このように元気な皆さんの姿を見ることができ、大変嬉しく思います。

年が明けて2026年になりました。十二支で言うと今年は午(うま)年です。実は『午』という字は、もともと馬を表す字ではありません。

昼の最も陽気が高まる“正午”を表す記号でした。その力強さや躍動感から、後に『馬』が当てはめられたそうです。馬と言えば、まっすぐ前へ進む力強さから、事業が発展する年、努力が実を結ぶ年とも言われます。また、馬は人の暮らしを支えてきた大切な存在で、家族を守り、幸せを運ぶ縁起の良い動物として親しまれてきました。

今日はその『馬』にちなんだ話を1つしたいと思います。皆さんは「人間万事塞翁が馬(じんかんばんじ さいおうがうま)」という言葉聞いたことがありますか。中国の古い物語に由来する言葉ですが、詳しい物語を紹介します。

ある日、塞翁(砦の近くに住む老人という意)という老人が馬を飼っていましたが、その老人の馬が逃げてしまいました。

周囲の人は「それは大変だ」と同情しましたが、老人は「これが不幸とは限らない」と言いました。

すると後日、その馬は立派な馬を連れて戻ってきました。

人々が「それは幸運だ」と言うと、老人はまた「これが幸運とは限らない」と答えました。

その後、息子はその馬から落ちて怪我をします。しかし、その怪我のおかげで戦争に行かずに済み、命を守ることができたのです。

このように「人生で起こる出来事は、幸せに見えることも、不幸に見えることも、その先でどう転ぶかは分からない」という意味です。

学校生活で考えるとどうでしょうか。

思うように成績が伸びなかったこと、失敗したこと、うまくいかなかった経験は、その瞬間は「不運」に思えるかもしれませんが、しかし、

その経験があったからこそ、努力の仕方を学び、仲間の気持ちが分かり、将来の自分を支える力になることも少なくありません。

逆に、うまくいったことや成功したことも、そこで満足してしまえば、その先の成長を止めてしまうことがあります。大切なのは結果そのものよりも、『起きた出来事から何を考え、何を学ぶか』ではないでしょうか。皆さんには、良い時も、思うようにいかない時も、「これは自分に何を教えてくれているのだろう」と一歩立ち止まって考えられる人になってほしいと思っています。

2026年という新しい年が始まりました。今年も楽しいこと、辛いこと色々あると思います。「人間万事塞翁が馬」という言葉を、ぜひ心に留めて、これからの日々を前向きに歩んでくれると嬉しく思います。

令和8年1月8日

愛媛県立北条高等学校長 菊池 正敏